



糊等で貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

讀書

羣書一覽序

淺草文庫

古人謂天下非無書而不可讀之為
難但眾書為難焉然不以此為
不獨為已而已所以供天下後
世之讀也故又讀之者先領
畧古人之所以使我長年不

群書一覽 初唐部六

快之樂者在於此一言而竟有
至理名言確可磨者乞乞之堆
本朝之在延喜天曆間肇讀彼
古之書其所習尚在於詩賦文
章之上毫無禪治故明經
以敷化稱性之道理之類寂而

莫聞矣畏哉自時以降遂而
亡之日應數百年之淹速弘
治永祿後天猷其執火熾激
熄而昇平之北延敷和漢之
學之兼行焉於是乎立言之
士濟輩出迺身目所陶鎔

和唐政序

心思工妙。其規模大段。槩歸於
自然。猶士大夫誇勢氣。文家
談揣摩。故自長短。歌詠。談諧。
而種之。文辭。或以劒。搜神。述異。
者。偶語。傳奇。作者。述志。隨手。鈔
寫。然。願其為書。成卷。快。浩繁。

又撰推瑣切。至於今日。綜而論之。
有文。延。汝。心。可。關。撰。有。恕。置。
而不顧之集。互有攻訐。紛如。求
認。焉。老師。宿生。安。折。衷。也。
尾崎雅嘉。夙負。執古之名。詩書
頌。誥。班。馬。志。傳。稍。闕。之。比。壯。通。

和書部序

念國學自古今。字母典法至。
教訣與秘昭晰。支分傳而無。
弊。近日類合其所。目見刊本活字。
寫冊。等數萬書。目不拘。雲過。
孰覈一。記注作者。名意。予一。
覽之。乃恣適。不錯焉。吾間真好。

深思之士。每通一義。揮心竊。
樂之。不復敢待。索之。後世子雲。
也。自今以後。和學一流者。必就。
此集。得其書。攻其義。則禮樂。
名物。激言大義。至。昔事。變。
必。其。實。美。嗟。乎。雅。素。之。功。於。

是乎偉矣哉

享和 新元 辛酉 臘月 穀旦

播州 奥田 元繼

竹窓 森世 黄書 圖

岸本東漢刀

群書一覽例言

一 此書に載るるの書目ハ予が二十年来涉獵するところの
 群書の中より鈔録するものなりハ記憶するものなり今
 りの篇目大意等概ち予が精粗ひらきしるるものなり
 一 著書のしるしをいへば其のしるしをいへば其のしるしをいへば
 けしむるものなりハ予がしるしをいへば其のしるしをいへば
 けしむるものなりハ予がしるしをいへば其のしるしをいへば

一 此書二十四門よりなり其の類乃書を挙げて其の類乃書を挙げて
 又人々のしるしをいへば其の類乃書を挙げて其の類乃書を挙げて

日本紀ハ國史の部ニ收むといへども其第一第二の神代卷の末
 書ハ神書の部ニ收め大和物語源氏物語等ハ其部ニ入らず物語の
 部ニ收むといへども平家物語栄花物語等ハ其時の實録ナ
 るハ雜史の部ニ收むといふべし

一 此書ニ假字ハ其の格致ニ依らず古書の大意と云ふハ
 古假字と用ひ近代の書ニハ今假字と用ひしハ其の格致
 童蒙の尺やすといふは其の格致ニ依らず童蒙の尺やすといふ
 一 古書のややく亡ひて今傳へしハ今偽書なりものす
 一 其書ハ人ニ具眼の人ニ依りて其真偽を以て

難くはげしきことありて其書體ハよくよくありて
 先革の議論ハ擧ぐ蒙士ノまじりて其のなり

一 遠境僻邑ノ人國學ニ志ハありて其書體ハよくよくありて
 國學ノ益ヲ其のハ頊屑の俗書及ヒ予ガ自撰の書ト
 一 多年抄録セテ書キテ再校シテ此一覽の中ニ收メ
 一 借園一ガテ或ハ大部一テ不日ニ業ヲ卒スルニ
 一 日の上木ヲ期スルものなり

群書一覽 和書部例言

二

一 卷首は和書部とありて漢土の書乃部と嗣刻
 せんのごうらぶ一あふゆかり
 一 予素より聞見博くふれを秘冊奥編のいひる
 りとていふはうらむもいはず耳迄き書ものあり
 せしむいふのいふもいふべしとていふはくも童蒙地
 りと思ひたせしむるがれと大方の君子ろの浅陋を朝
 こころをたしむる
 享和元年冬至日
 浪華尾崎雅嘉識

群書一覽目錄

卷之一

國史類 一葉

六國史類表國史本朝通鑑大日本史の類其餘編
 年の書數十部と載

神書類 一三葉

神道五部書十二部書ト部家書並加の書秋齋の
 書神代卷中臣被祝祠寺の註書其餘神皇の書等

雜史類 七十七葉

二鑑榮花物語續世繼保元平治物語盛衰記平家
 物語東鑑太平記櫻雲記の類其餘治亂興亡の雜記等

卷之二

記錄類 一葉

禮儀類典より諸家の記録百餘鈔等より

群書一覽 和書部目

有職類

十七葉

律令格式の書年中行事職原公卿補任等末の

書目等

氏族類

五十九葉

萬多親王の姓氏録より人々の傳元亨釋書作

者部類大系圖知譜拙記等に至る

字書類

七十七葉

倭名鈔新撰字鏡等より林逸の節用集和爾雅東

雅其餘和訓いろは假名遣の書等に至る

往来類

九十二葉

明衡往来新猿樂記より庭訓脣鷹鳥類聚等

の往来に至る

法帖類

九十六葉

三國筆海全書集古法帖耳比磨利帖其餘近葉

諸家藏刻の法帖等

卷之三

物語類

一葉

竹取の川河濱松等の古物語より伊勢大和源氏按衣

今物語堪中納言等に至る

草子類

六十三葉

枕草子はまぐ草等より舞の書に至る

日記類

七十二葉

紫式部和泉式部日記より日記の類

和文類

八十一葉

扶桑拾葉集拾遺後葉等の目錄和文作例の書

等を附す

記行類

九十七葉

土佐日記十六夜記等より近來諸家の道の記詞林

意行集等に至る

卷之四

撰集類

一葉

萬葉集二十二代集新葉集等

抄僻案抄頭注卷勘の類

私撰類

四十七葉

新撰和歌集續詞花集雲葉集風葉集藤葉

家集類

五十七葉

集等より古今新撰の六帖近代諸家の私撰集に至り
三十六人集より六家三玉の集其餘中古近代の

諸家集に至り

歌合類

九十三葉

寛平歌合殿上根合六百番千五百番の歌合より

各部類歌合職人盡歌合等に至り

百首類

九十九葉

定家卿の百人一首より百首部類其餘諸家の

百首に至り

千首類

百十三葉

為家卿の千首より千首部類よりび近代

の千首に至り

卷之五

類題類

一葉

勅撰類題新類題題林明題等の書

和歌雜類

十葉

和漢朗詠集蒙求和歌等より新古今竟寧和

歌厚瀨抄等に至り

撰歌類

十七葉

二十六歌仙後歌仙新歌仙中古歌仙女房歌仙釋

門歌仙集外歌仙自贊歌等

歌學類

二十四葉

和歌四式八重御抄袋草子袖中抄藻鹽草歌林

樸樹の類より和歌教訓の書よりしし書詞よせの書てにて

の書會式の書枕詞の書等に至り

詩文類

五十八葉

懷風藻經國集本朝文粹朝野群載菅家文

草等より萬里の帳中香四河入海惺窩羅の文集日本詩

史等に至り

醫書類

七十一葉

本朝古代の醫書大同類聚方醫略抄頓醫抄

萬字方其餘諸家珍藏の古写本等

教訓類

八十三葉

安然和尚の童子教十訓抄熊澤了齋の孝經外傳或向藤井懶齋の比賣鑑山崎闇齋の大和小学貝原篤信

の俗訓の類

釋書類

九十二葉

日本靈異記説法明眼論宝物集撰集抄等

釋教題林片岡山寺よる

管絃類

九十九葉

催馬樂神樂即曲琵琶笛琴カハハノ詠曲

の書等

卷之六

地理類

一葉

諸國風土記の殘缺貝原篤信の筑前續風土記

名所類

十九葉

諸國名所名亭歌集の類勝地吐懐編今案

畿内志の類諸國の地志図説等よる

隨筆類

二十七葉

一條禪翁の東齋隨筆一榻鴨兜筆河社監

尻其餘諸家の雜話類に

雜書類

四十二葉

江談古事談古今著聞集の類善隣國宝記異

稱日本傳馭戎慨言の類好古小録好古日録和漢硯譜の類

集古十種目錄花押藪萬室全書名物類聚の類書篋目錄の

類農業全書四季草圓珠經其餘雜書數十部

群書類從

百十葉

一千二百七十二種の書目附あり

總計三十四門

群書一覽卷之一

國史類

本朝六國史

百七十卷

日本書紀 三十卷 續日本紀 單卷 日本後紀 四十卷 或云三十卷今存十卷 字本二十卷 續日本後紀 二十卷 文德實錄 十卷 三代實錄 五十卷 以上六部皆中約の正史 下桃華葉 葉ハ六國史ニ新國史ハ云々云々の中書ノ稱セリ

日本書紀

二十卷 十五本

第一第二神代卷上下ト一 天枕岡關ト一 鸕鷀草葺不合尊ト一 十卷 八月ヨリイマデ凡人皇ノ所代九百ト十二年ノ中ノ事ヲ記セリ ○此書日ハ人皇四十四代元正天皇ノ養老四年ハ一山舍人親王及

又漢文の序なきは他^ツ奏上す事早^ク終^ル歌^ハ酒^ハ宴^ニの
 博士^カ及^ヒ都^ト講^ノ人^ノは^ハ禄^ハ叙^リり^シと^シ竟^ニ宴^ニり^シと^シ菅^ノ家^ノ
 の類^ノ取^ル國^ノ史^ノ百^ノ四^ノ十^ノ七^ノ卷^ニは^ハ陽^ノ成^ノ天^ノ會^ノ王^ノの^ハ元^ノ慶^ノ二^ノ年^ニ二^ノ月^ニ廿^ノ五^ノ日^ニ宣^ス
 陽^ノ殿^ノの^ハ東^ノ廂^ノに^ハ移^リり^シ後^ニ立^テ位^ト下^ニ告^ス國^ノの^ハ長^ノ愛^ノ成^ノ小^ノと^シあ^リ日^ニ中^ニ
 紀^ノ松^ノ海^ノあ^リた^リま^シい^ハ後^ニ立^テ位^ト下^ニの^ハ大^ノ外^ノ記^ノ島^ノ田^ノ然^ノ良^ノ臣^ノ松^ノ海^ノ
 手^ノは^ハ海^ノぞ^シせ^リす^ハい^ハ向^テ年^ノ之^ハ竟^ニ宴^ニり^シ○假^ニ字^ニ日本^ノ紀^ノ○
 乃^レ他^ノ者^ハす^ハ詳^カト^シ字^ノの^ハり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 代^レれ^ル私^ノ記^ノの^ハ河^ノか^リり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 勢^ノ州^ノの^ハ出^テ口^ノ延^テ佳^ニと^シ聴^クる^ハり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 近^ク古^ノの^ハ唐^ノ本^ノと^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 昔^ノの^ハ長^ノ寿^ノの^ハ人^ノ知^レあ^リの^ハ書^ノと^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ

と^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 乃^レ他^ノ者^ハす^ハ詳^カト^シ字^ノの^ハり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 代^レれ^ル私^ノ記^ノの^ハ河^ノか^リり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 勢^ノ州^ノの^ハ出^テ口^ノ延^テ佳^ニと^シ聴^クる^ハり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 近^ク古^ノの^ハ唐^ノ本^ノと^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 昔^ノの^ハ長^ノ寿^ノの^ハ人^ノ知^レあ^リの^ハ書^ノと^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 乃^レ他^ノ者^ハす^ハ詳^カト^シ字^ノの^ハり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 代^レれ^ル私^ノ記^ノの^ハ河^ノか^リり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 勢^ノ州^ノの^ハ出^テ口^ノ延^テ佳^ニと^シ聴^クる^ハり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 近^ク古^ノの^ハ唐^ノ本^ノと^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ
 昔^ノの^ハ長^ノ寿^ノの^ハ人^ノ知^レあ^リの^ハ書^ノと^シり^シ○又^ハ或^ハ日^ニ中^ニ紀^ノの^ハ夫^ノ國^ノへ^シ

一定なりし今梅下安藤為章の年山井開の
古今六帖の秘記あり
かゝるの舎人の二文字あり
推あるにせむ
のるは門部の王牛養馬飼りより
日本紀私記
十五卷二本
博士後五位下太政大臣安満弘仁元年
野朝臣高年元慶二年博士後五位下善淵朝臣愛成延喜

四年ハ博士後五位下有系約長春海承平ハ博士後五位
位下朝朝臣仲遠ホとのク天子ハ勅依奉一日本紀
仁の私記ハ望の私記カ諸書ハ引見○今世間ハ流布ナ
八卷人代九卷皇氏十卷より十五卷まで天皇の御代ハの紀
とついでハ神代ハ應神紀ナドと奉一餘ハ關卷ナ
日本紀竟宴歌 写本 二卷
上卷ハ元慶六年の竟宴のとき大御言國御ハ二人二首延喜六年
の竟宴二十一人此中四人各二首詠ナ合ヤク四十首右上卷ハ

和書部一

春の世に修りて、卷首自序の次、一書の綱領概らげりて、
一書が修するの概、舊記にも概らげりて、今、親王安麻呂
等のゆゑ、いふ書採者、いふに、
かゝる海せらるゝ、○一書の中、よく晋書に倣ふ、大伯の
謂、いふ、よ、いふ、吾國君は、大沖の苗裔、いふ、大伯の
か、いふ、いふ、蓋附會、いふ、いふ、梅す、いふ、
神皇正統記、いふ、昔日、中、ハ、三韓、ト、同種、いふ、
の書、概、桓武の序代、いふ、いふ、いふ、垂加、いふ、
大伯の、いふ、いふ、國史、いふ、いふ、いふ、いふ、
言、いふ、いふ、の親、房、流、系、いふ、いふ、いふ、いふ、
翻帝の、時、釋、圓、月、國、史、概、修、す、いふ、大伯の、
あ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
ら、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
あ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

の太伯の、いふ、附會、いふ、佛者、いふ、大日靈の、いふ、
来の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
統、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
神道、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
古の、事、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
宣言、す、聖賢、ハ、軌、と、操、く、紀載、す、二教の、證、す、
一書の、証、す、いふ、いふ、いふ、いふ、

日本書紀通證 二十五卷 谷川士清

古今諸家の、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
佛書、概、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
附録、三篇、いふ、親王傳、講國史等、第二卷、いふ、
神代紀、いふ、いふ、神代紀、いふ、いふ、
本文、ハ、伊勢神宮の、古本、ト、先達の、考、いふ、いふ、

雙言校す...の才一巻の彙言...
紀轉字の活字印...
号けり或ハ日中紀の文法古事記...
のねり...
の吳音漢音の假字...
戊辰の年成...
実連御宝曆...
の九序...
日本書紀註 写本 三十一卷

作者...
りけりハ口訣 討講録 十六字傳 纂疏 私記 崔昌事紀
近喜式 釋日本紀 日本後紀 遷都考 總書年紀 備宗傳
ホナリ 其餘...
重遠 近住 宗因 垂加 梅園氏 光海 羽 叶喜 松雲 兼方

桂翁抄

書紀集解

十卷 河村秀乃根

書紀の文辭ハ古文辭ナリ...
文茂記...
意ナリ...
又云此書日本の二字ヲ刪...
書ハ...
蓋中古の世多ク吳邦の書ナリ...
轉写...

書の字法改めく日本の二字よりなりは字繁新しくなり此
 ちの國号は漢の書に虞夏商周の字は繁西漢以下
 の國号は漢の書に漢の書に定種なり齊興恒かに世
 の變革は成はせしむるの世に稱すは漢書に漢書あり
 の号なりなりは例に用ゆるは故に漢書に漢書あり
 推りては漢書に漢書ありは漢書に漢書ありは漢書に漢書あり
 二子に刪すは○又は漢書に漢書ありは漢書に漢書あり
 本八卷末に慶長に支清系を記し國史の跋に慶長十五
 年洛内野子三白の跋ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 二年に兼頼ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 又嘉元甲辰に沙弥蓮惠ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 内大臣実隆公ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 今世盛なりは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 うは脚の傍に漢書に漢書ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五

龍應近の門人し寛延元年にまゝ一幅の圖一卷の書に
 て至りては此のハ小戸橋楳系の圖此のハ古本の書
 紀摘要ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 農家宿ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 十四軸ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 何の経ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 とありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 意ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 て参校ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 一とありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 これを示ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 膳写ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 好ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五
 十二卷ありは支清系を記し國史の跋に慶長十五

りてとて並に關外題は海卷は海内と云ふの字すといふ
所ありては想ふに平城の朝の本ありては五十卷の
未は支干姓名なりてはれど惜しむに残失しつゝ
予此本ありては考すは富疑始め解て大なる
今引くといふ古本と稱すといふは又熱田の神庫に藏す
といふ所ありては明和七年彼庫中より就て授すといふは永和
丁巳十一月四日四條金蓮寺四代上人がりては
といふは熱田大神の内院に藏すといふは九十五卷神
代紀の上巻なりと云ふは二軸といふは十一卷及び十一卷以下
關引く熱田本と稱すといふは又活字なりては其の中
刻すといふは大抵系なりては二の取べきといふは
以て活本と稱すといふは又活字なりては其の中
りては字すといふは神代紀の上より武烈天皇紀の
以て活本と稱すといふは又大中臣のなりては大中臣忠種といふ

りて字すといふは繼體天皇紀より持統天皇紀より引くといふ
中本と稱すといふはこれなり又壺井義知が授定すといふは
以て壺本と稱すといふはこれなり又壺井義知が授定すといふは
○此集解今刻すといふは神代紀より才十六卷武烈紀より
日本書紀或問私考字本 二卷 多田義俊
卷首は舊事紀古事記日本紀のなりては其の真偽は海内には
舎人親王の名の訓義日本紀講談代例本の同答は誤りては二卷
和訓のなりては十條河原より今存すといふは神代篇二卷日本書紀
閱せず

神武卷

日本書紀第二の卷なり 別刻のやせり
一巻

神武紀集解

二卷 龍瀬丘
神代紀評註著しては外宮神庫の東箱に満
の著述のりては自序よりては延宝甲寅春

和書部一

續日本紀

四十卷 二十本

四十二代文武天皇の元年八月より元明元年二月
 稱徳光仁の歴く桓武帝の延暦十年十二月より元正元年
 五年の間朝廷のゆゑ人臣の進退の記せり才一卷
 才ハ毎巻の首より後四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子
 士臣菅野朝臣真道等奉勅撰しり才二十一巻より才四
 十巻までハ毎巻の首より右大臣後二位兼行皇太子中衛大
 將臣藤原朝臣継縄等奉勅撰しり才一〇續日本紀日本後紀
 續日本後紀文徳實録三代實録五國史一稱す所の事
 文の體しし宣令の外ハ國語しり才一〇宣令
 未しり才一〇宣令の外ハ國語しり才一〇宣令
 今ハ刊行ハ明曆丁酉の事京都の蓬生卷立野春節の鳥カ
 巻尾ノ跋り也

日本後紀

二十卷 十本

桓武天皇の延暦十一年二月より淳和天皇の天長十年二月
 凡四十二年の事ハ記せり巻首ハ承和七年十二月此書を奉
 載せられたりハ彼國史ハ序の末より左大臣位臣若菜外
 緒副等八人の位署り也〇此書撰者のハ拾芥抄云日本後
 紀三十巻左大臣冬副奉勅撰或云右大臣位臣繼縄撰〇此後
 紀の全書久し亡失しり才一〇今字やハナす所の事
 才ハ毎巻の首より後四位下行民部大輔兼左兵衛督皇太子
 士臣菅野朝臣真道等奉勅撰しり才二十一巻より才四
 十巻までハ毎巻の首より右大臣後二位兼行皇太子中衛大
 將臣藤原朝臣継縄等奉勅撰しり才一〇續日本紀日本後紀
 續日本後紀文徳實録三代實録五國史一稱す所の事
 文の體しし宣令の外ハ國語しり才一〇宣令
 未しり才一〇宣令の外ハ國語しり才一〇宣令
 今ハ刊行ハ明曆丁酉の事京都の蓬生卷立野春節の鳥カ
 巻尾ノ跋り也

日本後紀

日本後紀

二十卷 十本

日本後紀鈔本

八卷

彼書の大抵を考つて... 第五 第八 第十三 第十四 第十七 第二十 第二十二... 已上八本... 原朝臣等奉勅撰... 教京阿... 赤の諸書... 文何左... 等勅撰... 諸書... 後紀... 其比...

も真中... 宝典... 文明の徳化... 檢校保己... 卷之五 延暦十五年七月... 卷之八 延暦十八年... 卷之十三 延暦二十四年... 卷之十四 大同元年... 卷之十七 大同二年... 卷之二十 弘仁元年... 卷之廿二 弘仁二年... 卷之廿四 弘仁五年...

日本逸史

四十卷

鴨祐之

和書部

一覽

十二

失し〜世に付り〜すは四位上鴨祐之縣主のみは紀乃
 年代のすもれ菅公乃類聚國史は散見す〜
 せん〜欲す〜の類聚國史も令部の〜
 下〜の〜残缺〜の他〜
 舊史の亡逸〜
 本紀令義解 新撰姓氏錄 等の諸書はも條附〜
 附す〜考及今〜
 格式姓氏錄と御補任日記 紀畧等の諸書は考へず此の
 月〜
 二月〜

第一卷 桓武天皇の延暦十一〜
 二月〜
 第二十五卷 平城天皇の大同二年〜
 第二十八卷 嵯峨天皇の弘仁元年〜
 第三十二卷 淳和天皇 天長元年〜
 月〜
 列行す

續 日本後紀

二十卷

太政大臣位一位右大臣房參議四位下式部大輔春澄
 德等勅御奉〜
 天皇一代の実録〜
 月〜

群書一覽

和書部

其良房志公の序に今刊ハ三野春節の旨寛文八年
十月春節の後行

文德實録

十卷

此書文德天皇所一代の実録一々嘉祥二年三月
年八月より九月の御代に陽成院の元慶二年十二
月右大臣正二位有宗の基経の序に其基経公等奏上せり
との書ハ都の良香菅公等編纂せり史に
文德天皇ハ嵯峨天皇の所孫仁明天皇の所子也○此基経公乃
序実ハ菅公の所代一々菅家文章草卷之七日本文德天皇実
録奉家君教所製也一載せり是美つ令一々
基経公の御代に其の御代一〇平維章ハ文德実録今の
刊平語字脱文多一々二卷ハ二百餘字の脱文あり未だ天皇
崩御のハ天皇所一代の盛徳ありけり此序ハ春秋世有
ニかられども其の御代一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇

乃序これより其の御代一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
行す

三代實録

五十卷 二十本

清和陽成光孝三代の実録なり天安二年八月より仁和二年
八月の御代に其の御代一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
一々序ハ其の御代一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
の御代に其の御代一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
編修せんハ其の御代一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
原朝臣時平 正三位守右大臣兼行右近衛大将菅原朝臣道真
後五位上行勘解由次官兼次外記参河権介大藏朝臣善行大
外記正六位上三統宿称理平等一々菅公の御代に其の御代
一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
一〇世に字の誤り一々春秋ハ天皇
其餘類聚表國史及諸書に證し一々春秋ハ天皇

和書部一

寛文十三年の
上本す
和河内府

古事記

三卷

四十二代元明天皇の和銅五年の太の安万侶詔の奉り神代
ア人皇と十四代推古天皇の所せそののの記せし
たの記を太安麻侶一人の纂修し日本紀の安万侶も史
臣の中列せし
起しそのの文法脈絡大に夫か
四年九月十八日臣安万侶の詔に禰田の阿礼の誦す
こらに勅語舊辭を以て献上せしむる或は大抵記す
ハ天地開闢より
ハ天の神以外日子波限建鶴草葺不合尊以前以上巻
神倭伊波礼毗古天皇以下品陀の所世以前以上巻
蘇我天皇以下小治田大宮以前以上巻すす賀茂真淵

秘訓解の附記より古史初は古事記先
とす日中紀ハ上古の教書撰選定せし
清人もの
と蘆つもの古事記ハ上古眞直の國史なり且國語を
とぬと古の風を古俗を古文を察す
よこののの

古事記傳

十八卷

本居宣長

此書既の傳りす所十七卷中一の巻を卷首に徳滿
古記の
ハ事聖徳太子獲我馬子大行も天皇記の國誌臣
連伴造國造百八十部并土民おのち江州録
系の
らす帝統及上古諸事記定めたり

和書部一

十五

十一の記はともよせしけり... 平城天皇御宇云は所代豊
國成建天皇御代和銅四年九月十八日太極天皇万倍と記
せしめその記と採録のれは同日五時より一時の山月廿
八日か入其切流くまきより序を... 今所代天皇
古記のゆゑは記不最古よりりして書記は回天は所代天皇
河浄天皇御代世養老四年より記の採録は記のゆゑは
わらわら記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
もかぎ... 古記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
所代天皇御代... 又記今世は
布や... 寛山の板は彫て... 伊
勢の神官... 度會延佳の古か... 採録は記のゆゑは記のゆゑは
これの記の字も... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
すも... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは

字の... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
と... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
古... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
其... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
と... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
○... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
て... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
人... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは
や... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは

舊事紀

十卷 五本

二十四代推古天皇二十八年聖德太子薨我馬子等執政奉
太子修撰... 採録は記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは記のゆゑは

ねむしすま令篇古事記の御入条に記すは
偽撰考が著せり。○真箇曰舊の紀傳を
百餘手あれ他をいゆれをふりし。○
一二の事をもとめて宣長曰世に舊の
のちのりたるは人の偽撰の事なり。○
太子命の撰ひたりし。○の紀傳に
ありしはまはるる。○
記すは

教頭古事記

十卷 五本

出は延佳技師の作し延佳の撰と舊事本紀傳の誤り
てり。○
記すは

教頭古事記

三卷

口人の説く近世刊行の古事記文字誤り多し予を考す
と故家よりあねれ抄けり。○
記すは

舊事紀偽撰考

一卷

多田義俊

序は誦先代之舊辭。○
記の段は先代舊事本紀二十卷。○
のせしめを其比。○

の中のものも十巻あり、八存の二十巻有り、
 ○此書舊事紀の体も、明證十箇條あり、
 奉と云いれ、傳述より、享保十六年於華洛春塘亭秋齋、
 兵部源義俊書し、

三 紀 辨 二 本 一 卷 同 上

日本紀舊事紀古事記二書ののり備あり
 先代舊事本紀 一名大成經 七十二巻 七十四本
 或の前代舊事本紀と作し又先代舊事大成經と号す○此書は
 美濃國墨瀧の朝音和尚ののり備あり、
 了く心部二十八巻副部之十四巻ののり、
 聖徳太子ののり、真の舊事本紀と云ふ、
 露心部四十巻刊行せり、
 刻板と云ふなり、今稀く遺りの刊を、
 此中才三十九巻宗徳經才四十巻 神教經

の二冊延宝年中の別刻あり、此神教經より、
 傳作せり、今全中の目錄を、大成經神皇本紀序傳、

卷第一	神代本紀	卷第一	先天本紀
卷第三	陰陽本紀	卷第二	黄泉本紀
卷第五	神祇本紀上	卷第六	神祇本紀下
卷第七	神事本紀上	卷第八	神事本紀下
卷第九	天神本紀上	卷第十	天神本紀下
卷第十一	地祇本紀上	卷第十二	地祇本紀下
卷第十三	皇孫本紀上	卷第十四	皇孫本紀下
卷第十五	天孫本紀上	卷第十六	天孫本紀下
卷第十七	神皇本紀上之上	卷第十八	神皇本紀上之下
卷第十九	神皇本紀中之上	卷第二十	神皇本紀中之下
卷第二十一	神皇本紀下之上	卷第二十二	神皇本紀下之下

卷第二十三	天皇本紀上之上	卷第二十四	天皇本紀上之下
卷第二十五	天皇本紀中之上	卷第二十六	天皇本紀中之下
卷第二十七	天皇本紀下之上	卷第二十八	天皇本紀下之下
卷第二十九	天皇本紀上之上	卷第三十	天皇本紀上之下
卷第三十一	天皇本紀中之上	卷第三十二	天皇本紀中之下
卷第三十三	天皇本紀下之上	卷第三十四	天皇本紀下之下
卷第三十五	聖皇本紀上之上	卷第三十六	聖皇本紀上之下
卷第三十七	聖皇本紀下之上	卷第三十八	聖皇本紀下之下

已上四十卷心部

卷第四十四	經教本紀下之下	卷第四十六	天政本紀
卷第四十五	祝言本紀	卷第四十七	天占本紀下
卷第四十七	大占本紀上	卷第四十八	天占本紀下
卷第四十九	曆道本紀上之上	卷第五十	曆道本紀上之下
卷第五十一	曆道本紀下之上	卷第五十二	曆道本紀下之下
卷第五十三	醫綱本紀上之上	卷第五十四	醫綱本紀上之下
卷第五十五	醫綱本紀下之上	卷第五十六	醫綱本紀下之下
卷第五十七	禮綱本紀上之上	卷第五十八	禮綱本紀上之下
卷第五十九	禮綱本紀下之上	卷第六十	禮綱本紀下之下
卷第六十一	詠歌本紀上	卷第六十二	詠歌本紀下
卷第六十三	御語本紀上之上	卷第六十四	御語本紀上之下
卷第六十五	御語本紀下之上	卷第六十六	御語本紀下之下
卷第六十七	軍旅本紀上	卷第六十八	軍旅本紀下
卷第六十九	未然本紀	卷第七十	憲法本紀

群書一覽 和書部一

卷第七十一 神社本紀 卷第七十二 國造本紀

已上二十四卷と續部と号す
才十二卷國造本紀の末より是所以一統有正部副部理如是
者於之○續部の中礼綱本紀は教中紀憲法本紀等別刊
の書なり○此書全部の勢をすては世に
ハ津國初むハ瀬津國ハ
國名ハ
其ハ桓武帝の時抄の名をヤ
何ハ
已上は倭代して在太子の時代と大わくありきを隋の世と

類聚國史

字本

二百卷

菅野大政大臣

七十二卷ともいふ依抄の他抄枚挙す
寛平五年菅原道實公の勅一々修撰せしめられたる上日
中紀より下迄十代実録よりして國史の中を行く部とやら
れ御りつめて二百卷とせられたる今も今世に傳へる
この令がらひすれどもをねねに
定まりしものしを古字やとありて殘缺
本朝世紀 字本 三十卷 信西法師
此書の撰者信西法師の傳言通意の
史探掇をせられたる所世紀は
てせられたる所措むる
白や外世紀ハ希代のゆきと國史よりして十國史

群書一覽

和書部一

てしよ... 類後の才と云ふ... 今平維章の伝

扶桑略記 十四卷

今井似... 阿闍梨皇圓抄... 伊勢兵乱記系譜... 親房村上天皇... 十代伊勢國司... 扶桑略記神皇正統記職原抄... 卷末... 又日本紀略... 記のうち... 略記... 内

如本... 拾要... 比叡山... の心... かり... き世の... 素略記... 雅嘉... 本減... 卷之一... 卷之二... 卷之三

卷之一 醍醐天皇 昌泰元年... 卷之二 醍醐天皇 延長元年... 卷之三 朱雀天皇 延長元年... 年闕

和書部一

卷之四 村上天皇上

卷之五 村上天皇中

卷之六 村上天皇下

卷之七 冷泉天皇

卷之八 華山天皇

卷之九 一條天皇上

卷之十 一條天皇下

卷之十一 後三條天皇

天曆元年より二年

天慶九年より大曆九年

天曆十一年より康保四年

康保四年より安和二年

安和二年より永觀二年

永觀三年より寛和二年

寛和二年より寛弘三年

寛弘三年より長徳元年

長徳元年より寛仁元年

寛仁元年より万葉四年

万葉四年より延久四年

延久四年より應徳元年

應徳元年より寛治八年

寛治八年より嘉承二年

嘉承二年より白河天皇

白河天皇二條天皇六條天皇

六條天皇高倉天皇

高倉天皇後鳥羽天皇

後鳥羽天皇元暦元年

元暦元年より建久二年

建久二年より元久元年

元久元年より應永元年

應永元年より享徳元年

享徳元年より寛文元年

寛文元年より天明元年

天明元年より天保元年

卷之十二 白河天皇

堀河天皇

天皇

卷之十四 後鳥羽天皇

元暦元年

建久二年

元久元年

應永元年

享徳元年

寛文元年

天明元年

天保元年

文政元年

天保元年

天保元年

三十三

日本紀略

写本

十一卷

和書部一

三十三

率合神會かゝのこゝろにてもふもろの理りも何れも夫天孫我
君所謂天神の子たりと何れも我邦に降り下りて西都鞆爾の僻
地は未だ何れも早く中洲の善國に都せ下りて環々梓木に
麴草の二世日向は居りて没すや神武四十五歳東征して宇
國に至り明年吉備國に下りて三年の頃舟楫修め吾食と聚
め其後河内國に至り長瀨を大に孔舎衛坂に下りて入櫛子
克らりて獲りて遂に長瀨を殺し大和國に入櫛子の入と
川見大神武の雄略を以てくろの難をくろかたけとて何れも
の大己貴り神武の長瀨を或は相拒きりて相戦ふこれと
怪むるに想ふに大己貴長瀨を我邦古昔の酋長とて神武
の代に下りて其の孫に本天百世萬世とて下りて君とて
亦盤に下りて彼強大の呉の越は滅せりて下りて我邦の室
依天地に下りて余りて下りて太伯の至徳とて下りて
信す設使圓月復生とて余り言に何れも下りてや下りて吾書

載日本八蓋夏后少康の裔カラス格下りて少康の庶子會稽に封
せり身は文け髪を湖江淮の彼に處りて番鼂負鼂に伍とて
遂に越の國に下りて下りて下りて觀望とて呉越とて我邦に
一葦の杭に往來の易きとて太伯の子孫とて下りて少康の後昆
子とて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて下りて
ひく我國固有の神皇と敬せん人不可なりとや曰ふも然也と
本朝通鑑提要 写本 二十九卷
神武天皇より後陽成天皇の慶長十五年まで卷末に曰右提要三十
卷ハ男勲門生野節坂亭とて本書を撰りて纂きりて省さるる
提りて編とて下りて易覽とて下りて下りて一寛文十年庚
戌の夏弘文院皇子士林忠
國史實錄 写本 七十九卷
此書七十八卷序目錄一卷初合せ七十九卷とて○卷首に天神七代

和書部

七十九

傳馬遷の書孟堅蔚宗以下の作技奉すよすなりし十凍水の通鑑
これに宇籠すものなり夫 本朝と略すは天七地五の代ハ置と論
中覆中天皇よりあく國史置らるる以來豊聰の紀阿禮之論
舍人の書相結く作らるれ 本朝の史から菅野真直の續紀と撰
す藤原緒嗣の後紀と撰す文徳と起る淳和と起る仁明の事と記
すものハ良房から文徳の二つハ記すもの基終かりて代實録ハ
時平の撰すもの宇多よりあく正史の闕するもの七百有餘
歳正保年中我祖羅山先生 公命を受く本朝の史ハ撰すハ
や編ハ終らざりて故有く止寛文年中我祖翁峰先生又 公命を
受く前は編すもの書の補一名ハ賜つて 本朝通鑑よりハ舍
人の書記より以下近代の事は至るまで坦然と明白かり 本朝の
史ハ補すもの一既成の後我祖より國史實録と撰すものより
下々共家君これハ補すもの漸く増えり業ハ編ハかりて
七十卷とす去年の林鐘より今茲の大簇と至る今其編と終勤

たりし一且門生一両輩ハ一相代てこれハ書せしむ既成の
後其一本ハすれえら以て大兄ハ賜ひ其一本ハ則以て小子ハ一嗚呼小
子側侍りて 本朝事跡の大略ハ知りて得るものハ幸なり且此
書ハたつものハ幸の又幸かり以て謹言ハ藏めく聊千金ハ享す
悦びてすや 元禄十六祀昭陽協怡建富之月確軒林志書
第一卷 元九百七十年 神武天皇の甲寅五十四年一契と稱す
懿徳孝昭孝安孝靈孝元開化崇神垂仁景行成務仲哀神功の教朝
ハ歴く應神天皇の壬申四十二年一盡
第二卷 九百九十四年 仁徳天皇の癸酉元年一契と覆中及正
元孝康安雄畧清寧顯宗仁賢の教朝ハ歴く武烈天皇の丙戌
八年一盡
第三卷 九百四十年 武烈天皇の丁亥九年一契と純體安雨
宣化欽明敏達用明崇峻の教朝ハ歴く推古天皇の戊子三十六年
一盡

第四卷 九三十二年 舒明天皇の己丑元年、起、皇極、孝徳の朝、
 朝、ハ齊明天皇の辛酉七年、盡
 第五卷 九三十六年 天智天皇の壬戌元年、起、持統天皇の
 丁酉十一年、盡
 第六卷 九三十八年 文武天皇の戊戌二年、起、元明の朝、ハ歴
 く、元正天皇の甲子神龜元年、盡
 第七卷 九三十五年 聖武天皇のし丑神龜二年、起、己丑天
 平勝宝元年、盡
 第八卷 九三十二年 孝謙天皇の庚寅天平勝宝二年、起、廢
 帝の朝、ハ歴、稱徳天皇の庚戌宝龜元年、盡
 第九卷 九三十二年 光仁天皇の辛亥宝龜二年、起、辛酉天
 應元年、盡
 第十卷 九三十八年 桓武天皇の壬戌延暦元年、起、平城天
 皇の己丑大同四年、盡

第十一卷 九三十四年 嵯峨天皇の庚寅弘仁元年、起、淳和天
 皇の癸丑天長十年、盡
 第十二卷 九三十五年 仁明天皇の甲寅承和元年、起、文徳天
 皇の戊寅天安二年、盡
 第十三卷 九三十九年 清和天皇の壬午貞觀元年、起、陽成の
 朝、ハ歴、光孝天皇の丁未仁和二年、盡
 第十四卷 至第十八卷 九百二十四年 宇多天皇の戊申仁和四年、起
 醍醐朱雀村上冷泉圓融花山の教朝と歴、一條天皇の辛亥寛
 八年、盡
 第十九卷 九三十五年 三條天皇の壬子長和元年、起、後一條
 天皇の丙子長元九年、盡
 第二十卷 九三十二年 後朱雀天皇の丁丑長曆元年、起、後冷泉
 天皇の戊申治暦四年、盡
 第二十一卷 九三十九年 後三條天皇の己酉延久元年、起、堀河天皇

の丁亥嘉承二年の盡
 第二十二卷 九三十四年 鳥羽天皇の戊子天仁元年の起り崇徳天皇
 白土の辛酉永治元年の盡
 第二十三卷 九十四年 近衛天皇の壬戌康治元年の起り乙亥又
 壽二年の盡
 第二十四卷 九三三年 後白河天皇の丁丑保元三年の起り戊寅又
 三年の盡
 第二十五卷 九十年 二條天皇の己卯平治元年の起り六條天皇
 の戊子仁安三年の盡
 第二十六卷 九十一年 高倉天皇の己丑嘉應元年の起り己亥治
 承二年の盡
 第二十七卷 九二年 高倉天皇の己亥治承三年の起り安徳天皇
 白土の庚子治承四年の盡
 第二十八卷 九三年 安徳天皇の辛丑美濃元年の起り泰卯

壽永二年の盡
 第二十九卷 九二年 後鳥羽天皇甲辰元暦元年の起り己巳
 治元年の盡
 第三十卷 九四年 後鳥羽天皇乃丙午文治二年の起り己
 西五年の盡
 第三十一卷 九九年 後鳥羽天皇の庚戌建久元年の起り戊
 午九年の盡
 第三十二卷 九十二年 土御門天皇の己未治元年の起り庚午
 承元四年の盡
 第三十三卷 九十一年 順徳天皇の辛未建暦元年の起り辛
 己承久二年の盡九條廢帝附
 第三十四卷 九十一年 後堀河天皇壬午貞應元年の起り壬辰
 負水元年の盡
 第三十五卷 九十四年 四條天皇の癸巳天福元年の起り後法成天皇

皇の丙午寛元四年の盡

第三十六卷 凡二十八年
大自王の甲戌文永十一年の盡

後深草天皇の丁未宝治元年の起り寶山

第三十七卷 凡二十七年
大自王の朝政歴く後伏見天皇乃辛丑正安二年の盡

後宇多天皇のし亥建治元年の起り伏見

第三十八卷 凡二十七年
大自王の戊午文保二年の盡

後二條天皇の壬寅乾元二年の起り花園

第三十九卷 凡二十三年
元弘元年の盡

後醍醐天皇の己未元應元年の起り享享

第四十卷 凡二十年
三年閏二月の盡 光嚴天皇附

後醍醐天皇の壬申元弘二年の起り泰西

第四十一卷 凡一年
十二月の盡 光嚴天皇附

後醍醐天皇の癸酉元弘三年二月の起り

第四十二卷 凡二年

後醍醐天皇の庚戌建武元年の起り乙

亥二年の盡

第四十三卷 凡一年
延元二年の盡

後醍醐天皇のし亥建武二年の起り丙子

第四十四卷 凡三年
年の盡 光明天皇附

後醍醐天皇の丁丑延元二年の起り己卯四

第四十五卷 凡九年
自和四年の盡 南朝後村上天皇附

光明天皇の庚辰暦應三年の起り戊子

第四十六卷 凡二年
觀應二年の盡 南朝後村上天皇附

崇光天皇の己丑貞和五年の起り辛卯

第四十七卷 凡十七年
應安七年の盡 南朝後村上天皇附

後光嚴天皇の壬辰文和元年の起り戊申

第四十八卷 凡三年
亥四年の盡 南朝長慶院附

後光嚴天皇の己酉應安二年の起り辛

第四十九卷 凡二年

後圓融天皇の壬子應安五年の起り甲

群書一覽 和書部一

宣七年、盡 南朝長慶院附
 第五十卷 凡八年、後圓融天皇のし卯、永和元年、起、壬戌、永徳二年、盡 南朝後龜山院附
 第五十一卷 凡十三年、後小松天皇の癸亥、永徳三年、起、癸酉、明徳四年、盡 南朝後龜山院附
 第五十二卷 凡二十五年、後小松天皇の甲戌、應永元年、起、猶シテ老、天皇の戊申、長元元年、盡
 第五十三卷 凡二十六年、後花園天皇の己酉、永亨元年、起、甲申、寛心五年、盡
 第五十四卷 凡四年、後土御門天皇の乙酉、寛心六年、起、戊子、應仁二年、盡
 第五十五卷 凡二十年、後土御門天皇の己丑、文明元年、起、戊申、長亨二年、盡
 第五十六卷 凡十二年、後土御門天皇の己酉、延徳元年、起、

庚申、明應九年、盡
 第五十七卷 凡二十六年、後柏原ヨロシガ天皇の辛酉、文龜元年、起、丙戌、天永六年、盡
 第五十八卷 凡二十年、後奈良天皇の丁亥、大永七年、起、丙午、天文十五年、盡
 第五十九卷 凡八年、後奈良天皇の丁未、天文十六年、起、甲寅、二十三年、盡
 第六十卷 凡三年、後奈良天皇のし卯、弘治元年、起、丁巳、三年、盡
 第六十一卷 凡四年、後親町オホノボ天皇の戊午、永禄元年、起、辛酉、四年、盡
 第六十二卷 凡五年、後親町天皇の壬戌、永禄五年、起、丙寅、九年、盡
 第六十三卷 凡三年、後親町天皇の丁卯、永禄十年、起、己巳、

和書部一
 一和書部一

和書部一覽

十二年、盡

第六十四卷 凡二年

正親町天皇の庚午元重元年、起り至

申二年、盡

第六十五卷 凡二年

正親町天皇の癸酉天正元年、起り至

二年、盡

第六十六卷 凡五年

正親町天皇の丙子天正四年、起り至

八年、盡

第六十七卷 凡二年

正親町天皇の辛巳天正九年、起り至

十年、盡

第六十八卷 凡二年

正親町天皇の癸未天正十六年、起り至

申十二年、盡

第六十九卷 凡二年

正親町天皇の乙酉天正二十二年、起り至

丙戌十四年、盡

第七十卷 凡五年

後陽成天皇の丁亥天正二十五年、起り至

辛卯十九年、盡

第七十一卷 凡二年

後陽成天皇の壬辰文祿元年、起り至

癸巳二年四月、盡

第七十二卷 凡二年

後陽成天皇の癸巳文祿二年五月、起り至

乙未四年、盡

第七十三卷 凡二年

後陽成天皇の丙申慶長元年、起り至

戊戌二年、盡

第七十四卷 凡二年

後陽成天皇の戊戌慶長二年、起り至

己亥四年、盡

第七十五卷 凡一年

後陽成天皇の庚子慶長五年正月、起り至

起り八月、盡

第七十六卷 凡一年

後陽成天皇の庚子慶長五年九月、起り至

起り十二月、盡

第七十七卷 凡四年

後陽成天皇の辛丑慶長六年、起り至

和書部一覽

三十二

甲辰九年一盡

第七十八卷 九十七年

亥十六年一盡

已上總目錄あり又毎巻のつづめは目錄あり第一巻の目錄と左の如く
國史實錄卷之一

神武 治世七十六年

安寧 治世七十八年

孝昭 治世八十二年

孝靈 治世七十六年

開化 治世六十年

垂仁 治世九十九年

成務 治世六十年

神功 治世九十九年

右十六世凡九百七十年

崇徳 治世三十四年

孝安 治世百二年

孝元 治世五十七年

崇神 治世三十八年

景行 治世三十九年

仲哀 治世九十九年

應神 治世五十年

空後五年在其申

第二巻以下目錄略

大日本史 写本

二百四十六卷

西山公御撰

神武天皇より後小松天皇まで本紀あり

史漢の體に據りて撰せられたる其中に神功皇后松皇妃傳は收れ
大友皇子松帝紀に載りて神武の古野ありて世に傳へたる南
約の心統へりて此公の所決りたる巻首は享保三年

六月從五位下大學頭若菜信篤の序 正徳五年十一月抄中約言
從之位原個條の序 享保五年十月從五位下西條中約原
竟約此序黃龍社寛原侯の序亦同是決りて修史例六十五
條に奉りて此書本紀七十三巻列傳一百七十巻序目錄二巻

計二百四十六巻とす

第一巻より 第七十三巻まで 帝王本紀七十三巻とす

第七十四巻より 第八十五巻まで 后妃列傳十二巻とす

第八十六巻より 第九十九巻まで 皇子列傳十四巻とす

第一百巻より 第二百五巻まで 皇女列傳六巻とす

第百六卷より 第百七十八卷まで 諸臣列傳七十一卷とす
 第百七十九卷より 第百八十六卷まで 將軍列傳八卷とす
 將軍 原打物より 足利義滿より
 第百八十七卷より 第百九十一卷まで 將軍家族列傳五
 卷とす
 第百九十二卷より 第百九十二卷まで 將軍家臣列傳三卷とす
 第百九十四卷より 第百九十八卷まで 文學列傳五卷とす
 第百九十九卷より 第百九十九卷まで 歌人列傳四卷とす
 第百九十九卷と 孝子列傳二卷とす
 第百九十九卷と 義烈列傳一卷とす
 第百九十九卷と 列女列傳一卷とす
 第百九十九卷と 列女列傳一卷とす
 第百九十九卷と 隱逸列傳一卷とす
 第百九十九卷と 方伎列傳一卷とす
 第百九十九卷と 第百九十九卷まで 叛臣列傳三卷とす

第百三十一卷より 逆臣列傳一卷とす
 第百三十二卷より 第百四十二卷まで 外國列傳十二卷とす
 外國ハ 隋 唐 五代 吳 越 宋 遼 金 蒙古 明
 新羅 高句麗 高麗 百濟 任那 耽羅 渤海 蝦夷
 肅慎 吐火羅 舍衛 南天竺 林邑 崑崙 等なり
 ○修史例より 凡そ史の文紀傳の根據するところ 務めくろく 舊さ
 り 道し 輒く 改め 削す 下 紀と 神武より 持統より 今 舊さ
 り 日本 紀より 舊事 紀 古事 記 類聚 國史 日本 紀 畧 等 の 古
 事 へ 取 り の 下 へ 所 と して 今 史 用 く 成 る の 方 あり 抄
 下 之 代 實 録 一 例 一 例 但 列 傳 ハ 此 例 一 例 下 傳 一 例
 方 あり 抄 下 是 抄 一 例 一 例 但 列 傳 ハ 此 例 一 例 下 傳 一 例
 下 其 史 一 例 一 例 但 列 傳 ハ 此 例 一 例 下 傳 一 例
 の ハ 一 例 一 例 但 列 傳 ハ 此 例 一 例 下 傳 一 例

新書一覽

舊事本紀	先代舊事天皇紀	古事記	日本書紀
續日本紀	日本後紀	日本後紀纂	續日本後紀
文德實錄	之代實錄	類聚國史	新國史
官吏記	扶桑略記	日本紀略	神皇正統記
續神皇正統記	歷代皇紀	一代要記	本朝世紀
愚管抄	百鍊抄	毘沙門堂所藏記	帝王紀抄
帝王編年記	本朝編年錄	皇年代畧紀	皇代畧記
皇代記	年代記	畧年代記	鳩嶺年代記
年代殘篇	編年殘編	大業院年代記	如是院年代記
和漢合符	和漢合運曆	和漢合運	天地根元歷代圖
二中歷	水鏡	大鏡	大鏡裏書
今鏡	增鏡	世繼物語	榮華物語
康平記	將門記	陸奥軍記	陸奥話記
奥羽軍記	奥州後三年記	五代帝王物語	東鑑

新書一覽

東鑑脫露	東鑑補遺	保元物語	平治物語
平家物語	平家物語劔卷	源平盛衰記	承久記
保曆間記	太平記	難太平記	梅松論
花營三代記	元弘日記裏書	永亨記	閑城書
閑城裏書	吉野事書案	船上錄	伯耆卷
足利治亂記	室町日記	明德記	應永記
豫章記	櫻雲記	延喜御記	天曆御記
李部王記	負信公記	天慶二年記	九曆
小右記	權記	道長記	左經記
水左記	春記	小一條院記	師實記
師實家記	經信記	匡房記	後二條閑白記
中右記	長秋記	承久二年外記	大府記
永昌記	忠通記	師遠記	宇槐記
兵範記	傳記	台記別記	宇槐雜記

和書部一

三十五

三槐記	顯應王記	玉海	愚昧記
古記	古記別記	仲資王記	明月記
殿記	之長記	自曆記	業資王記
大外記中原師光記	猪鬮園白記	玉葉	岡屋園白記
平戶記	深心院園白記	後愚昧記	同別記
仁部記	吉續記	後深心院園白記	管見記
白襲記	實基記	後中記	重長記
賴平記	經信記	番記	編記
山丞記	經慶記	信盛記	經長記
門葉記	伏見院御記	萬一記	花園院御記
雅吉記	實恭記	成恩寺園白記	薩戒記
實躬記	園大曆	資益王記	業頭王記
親長記	大外記康富記	和長記	應永十三年曆裏書
天書	古語拾遺	鎮座本紀	鎮座傳記

鎮座次第記	太田命傳記	倭船世紀	室基本紀
二所皇大神宮例文	大神宮延曆儀式	字佐託宣集	諸神記
諸神根源抄	神代奧義秘抄	神祇記	日本紀私記
釋日本紀	日本紀纂疏	一宮記	熱田社緣起
二荒山記	松浦社本緣	丹生明神記	二十二社本緣
寺社雜事記	日吉神輿入洛記	春日神木入洛記	八幡思童訓
石清水八幡緣起	鳩嶺官事抄	鳩嶺雜錄	鳩嶺雜事記
石清水回祿記	石清水善心寺書	賀茂注進雜記	嚴島請記
北野緣起	荏柄緣起	聖廟記	名法要集
律	令義解	令集解	類聚三代格
延喜式	內裏式	儀式	新儀式
法曹類林	法曹至要抄	官曹事類	政事要略
貢銀記	崇金記	柱下類林	西宮記
北山抄	無名抄	年中行事	禁秘抄

和書部一

和書部

公事根源

朔旦冬至記

心安御即位記

宸筆御八講記

讓位部類

日吉歡山行幸記

改元鳥免記

四條院御葬禮記

鹿苑院御葬禮記

職事補任

吉部秘訓抄

建武式目

經國集

田氏文集

恒例公事

後一條帝即位記

元弘元年御幸渡御記

天祚禮記職掌錄

伊勢奉幣雜例

書字山行幸記

改元部類

龜山院御葬禮記

推緣博義滿詞

辨官補任

元秘別錄

新加制式

文華秀麗

菅家文章

行類抄

崇徳院即位記

行幸部類記

立坊次第記

伊勢公卿勅使例

北山行幸記

職原抄

伏見院御中院記

攝関次第

藏人補任

庭槐抄

懷風藻

魚題詩

菅家後草

除目大成

文應皇太后記

宸筆代了記

院号定部記

弘安記

革命勘文

扶桑抄

後松院升遐記

公卿補任

補宣補任

拓植記抄

凌雲集

都氏文集

本朝文粹

續本朝文粹

基俊朗詠集

表白集

清水寺額文

古今集抄

千載和歌集

新拾遺和歌集

真名伊勢物語

土佐日記

和泉式部日記

清輔尚書會記

俊成龜名抄

中殿御會部類記

花鳥餘情

本朝麗藻

性靈集

梅城錄

萬葉集

後撰和歌集

新古今和歌集

新撰古今和歌集

伊勢物語疑抄

紫式部日記

辨内侍日記

清輔奧義抄

長明龜名抄

晴御會部類記

井注抄

扶桑集

玉造不世表書

桂林遺芳

古今和歌集

拾遺和歌集

新勅撰和歌集

新葉和歌集

伊勢家集

清少納言枕草子

長能集

頭昭陳狀

八雲御抄

南朝五百番歌合

三五記

朝野群載

賀表部類

雜言奉和

古今集顯注密勘

後拾遺和歌集

玉葉和歌集

伊勢物語

大和物語

赤染衛門集

清輔家草子

俊成家集

後鳥羽院口傳

河海抄

鴨長明終焉抄

和書部

和書部

三五記

西行物語	撰集抄	山家集	後龜山帝親公題辭
李花集	嘉喜門院集	草菴集	愚向賢抄
仙源抄	和秘抄	和歌秘傳抄	私語抄
二代集	微書記物語	清嚴茶話	兼載雜誌
和歌不審	歌枕	東常綠圖書	作者部類
勃撰次茅	古今集目錄	古今聽傳記	催馬樂秘抄
續教訓抄	體源抄	新撰姓氏錄	神皇系圖
皇胤紹運錄	紹運要略	皇帝系圖	帝王系圖
皇胤系圖	椿葉記	延喜本系	後醍醐院系圖
尊卑分脈	勸修寺系圖	冷泉系圖	物部系圖
大江系圖	藤原系圖	源氏系圖	菅原系圖
豐原系圖	紀氏系圖	橘氏系圖	清原系圖
中原系圖	和氣系圖	丹波系圖	坂上系圖
平氏系圖	大中臣系圖	吉田系圖	卜部系圖

橘氏系圖	名和系圖	児島系圖	北畠系圖
足利系圖	喜連川系圖	結城系圖	赤松系圖
石野系圖	足助系圖	舟木系圖	宇都宮系圖
菊池系圖	由良系圖	鳥居系圖	有馬系圖
佐々木系圖	北條系圖	相馬系圖	津守系圖
二階堂系圖	大館系圖	細川系圖	上杉系圖
今川系圖	高階系圖	小笠原系圖	石橋系圖
山名系圖	梶川系圖	千葉系圖	斯波系圖
畠山系圖	古河系圖	武田系圖	越智系圖
秋月系圖	丹治系圖	小野系圖	廣峰系圖
色川系圖	拓植系圖	吉見系圖	足利家譜
足利判鑑	大内家譜	細川家譜	上杉家譜
小笠原家譜	今川家譜	名和家譜	大多和家譜
井伊家譜	河野家譜	少貳家譜	結城家譜

和書部一

北條家譜	紀氏家譜	土岐家譜	鳥津家譜
織田家譜	結城文書	野上文書	河野文書
岡岡家始末	土岐圖書	名和傳譜	菊池武將申狀
諸家大系圖	錄記將系	岡東評定傳	將軍執權次芽
錄倉書牒	若州守護次芽	若州今富領主次芽	尺素往來
多田院文書	謚号雜記	寬平御遺詔	後伏見帝御書
後醍醐帝賜名和長年宸翰		後醍醐帝賜高野山詔書	醍醐寺所藏勅書
東大寺尊勝院所藏勅書		藥衣所藏繪旨	類聚傳名鈔
禁綱代官符	筑紫風土記	肥前風土記	續古事談
江談抄	濫觴抄	古事談	宇治拾遺物語
十訓抄	古今著聞集	今昔物語	古野拾遺
室物集	沙石集	長明方丈記	嵯峨野物語
細川賴之物語	文祿清談	落書露頭	三善清高野山進狀
徒然草	日本長曆	源通冬願文	

三國傳記	最要抄	瀧觴錄	初例抄
小笠原貞宗目書抄	建武二年三年記	東齋隨筆	今川狀
同外錄	拾芥抄	雲井春	仁和寺書目錄
上宮記	聖德太子傳	曾我物語	根元曾我
上宮法皇帝記	柿本人丸傳	太子傳畧	太子傳補闕記
田邑傳記	藤原基經家傳	藤原百川傳	和氣清麻呂傳
女院小傳	後宮略傳	藤原保則傳	恒負親王傳殘編
齋宮抄	齋宮考	貴女抄	後宮抄
作者部類	統三代作者部類	齋院記	齋宮齋院記
弘法行狀要集抄	弘法行狀記	三十六人歌仙傳	新葉集作者考
明惠傳	黑谷上人傳	弘法行狀纂要抄	淨藏法師傳
元亨釋書	鑑真東征傳	恒負親王傳	恒性法親王傳
往生傳	統往生傳	日本高僧傳	高僧傳要文抄
		拾遺往生傳	後拾遺往生傳

新書一覽

往生極樂記 常樂記 四天王寺手印記 慶岳要記
 延曆寺供養記 中堂供養記 中堂勘文 多武峰緣起
 談峰畧記 南都樂師寺緣起 仁和寺御傳 仁和寺諸堂記
 仁和寺諸記抄 仁和寺諸院家傳 光臺院御室灌頂記 釋家官班記
 護持僧次第 西院熊野御詣記 祈雨日記 祈雨御讀經記
 請雨經法記 東寺長者補任 東寺雜抄 東寺過去帳
 東寺修行日記 僧官補任 僧綱補任 同裏書
 御受戒記 孔雀經御修法記 五壇法畧記抄 東大寺要錄
 東大寺統要錄 醍醐報恩寺書 醍醐寺座主次第 醍醐雜事記
 醍醐雜抄 大乘院文保二年記 勝尾山流記 吉水院文書
 毘沙門堂記 祇園修行日記 金剛峰寺取藏書 勸修寺諸記拔萃
 河州通宝寺文書 美濃番馬蓮華寺鬼簿 河州勸心寺文書
 味曇藏 大安寺緣起 鞍馬寺緣起 笠置寺緣起

天台座主記 安井代門跡淳茅 安井傳記 諸門跡譜
 巡禮記 續心法論 禪林諸祖傳 南禪寺記
 妙心寺記 妙心寺六祖傳 魚文禪師行狀 佛國師行狀
 一率禪師行狀 普門禪師行狀 圓照禪師行狀 一休寺譜行實
 御制南禪寺梁牌 鎌倉理智光寺牌 相國寺供養記 小野尊範文書
 直遍言上狀 日蓮注函贊 季子瓊日錄 卍雲日件錄
 義堂日三集 鎌倉松岡過去帳 一休真跡色紙 善隣國宝記
 後漢書 隋書 管子 唐書
 新唐書 五代史 遼史 元史
 文獻通考 曲江集 文苑英華 唐詩品彙
 玉維集 古文世編 東國通鑑 三國史記
 百濟本紀 通計六百七十餘部
 大日本史贊 寫本 二卷
 此書八日中史中紀列傳の末に附して贊寫本ありしもの

和書部

四十

群書類

本朝通紀

五十五卷 長井定宗

定宗ハ奥州會津の隠士シ凡ク書編輯の大體ハ文公の直
鑑綱目陳周の綱鑑のけハ倣ふニ似テ一ツモ書編輯四
く一々其義大ニ異ナリ凡例ニケシ

前編 二十五卷

神武天皇甲寅の年より血統天皇の久壽

二年のり

後編 三十卷 日向河内のは元より日向陽成ゆれ天正

十八年一三年

日本春秋

五十卷 僧日初

事實日ハ史ニ於テ一ツ年紀ニシテ方一ツ年ノ
修ハルヤ中ノ事ヲ示スルニ僧顯曰ク標ニシテ褒貶の語五
人ナリ一々惡ヲ懲一善ヲ勸メ此ニシテ一ツ年ノ事ヲ
括カレ田の事ニシテ常ノ食ヲ示シテ示シテ一ツ年ノ事
ハ脚ニシテ如カキ衣襟ニシテ一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ

抄書の草稿ハ及古の... 一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ

古史通

五卷 源君美

本書四卷ニ讀記凡例一卷ヲ附シ注代トシ注代ノ下ニ
凡例ニシテ記す凡例ニシテ此書舊事紀古事記日本
紀等ニシテ一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ一ツ年ノ事ヲ
據スルノ要ヲ撮リ揚テ一ツ年ノ文辭の解釋ナシテ一ツ年ノ
條の下ニ低クシテ一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ一ツ年ノ事ヲ
テおねすは叙の久ハ多ク古ハ少シハ多ク一ツ年ノ事ヲ
のりトシ舊事紀古事記日本紀等ニシテ一ツ年ノ事ヲ
ハハ名教ニシテ一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ一ツ年ノ事ヲ
一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ一ツ年ノ事ヲ示シテ示シテ

讀史餘論

九卷 同上

群書類 和書部一

四十一

和書一覽

第一卷

上中下

中約天下の大勢九変一武家の代又五変せし徳満の

幼き并は格政始の 関白并は察立始の

宇多醍醐村上天代格政始の

冷泉以は八代格政始の

上皇并は格政始の 鎌倉殿并は天下格の

小条陪并は格政始の 附皇統并は格政始の

後醍醐復位の 南北并は格政始の

第ニ卷 上中下 中世并は格政始の 北条代并は格政始の

足利殿北朝の建らるる并小室町代と將軍の事
信長治世の 秀吉天下の

假字

日本紀 写本

二十卷

此書何人の所為か... 漢字... 和訓... 精密... 私記の訓...

山

問文神代卷 写本

二卷

賀茂真淵

日本紀第一第二の巻... 訓... 真淵七十三

和書部一

四十二

神書と近ごろあ人の不蔵に備置しつるに便聚とあるの

神書類

神道五部書 写本

五卷

倭姬命世紀 一名大神宮本紀 天照坐伊勢二所皇太神宮御鎮座次第記
一名河波良波記 豐受皇太神宮御鎮座本紀 一名飛鳥本紀 伊勢二所皇太
神御鎮座傳記 二名太田傳記 造伊勢二所太神宮室基本紀 已上
五部度會の延佳諸書に引異に考へたり

神道十二部書 写本

十二卷

倭姬世紀 御鎮座次第記 御鎮座本紀 御鎮座傳記
室基本紀 天口事書 古老口實傳 御奉仕記 御鎮座本紀
機殿規式帳 心御柱記 神鳳鈔 以上十二部は禁河のま
倭姬世紀 写本 一卷

群書一覽

和書部一

四十一

和書部

此書ハや紀の作者飛鳥三代の孫大神の御氣天武天皇の頃記
置也其乃小支七代の孫神宣五月麻呂稱徳天皇の所字神
護慶雲二〇二月七日考訂清書一採集せしむ
此書太神宮神祇本紀十部十二卷の中より上下二
上巻ハ乱世ノ度ノ火災ノ終失ノ下巻世紀ハ今ノ成
〇倭姫命ハ垂仁天皇第四の皇女なり崇神天皇の五十八
豐鉦入姫命ニ代リク齋美ニ立テ其ノ所産ハ
御前ノ心ヲ過ラセシ垂仁天皇ノ二十六年伊勢ニ
まゐラセテ長令ニ雄畧天皇ノ所字ハ五百餘ヲ
そゞろ素より清美ニナリシハ本注ノや
りハ小支七代ノ所産ニシテ本神ノ所産
〇是説ハ元長泰清記ニ人皇九代開化天皇ノ
中ニ箱の中ニ虫ノ心ヲ産メテ其ノ所産ハ
奪胎換骨ノ所産ナリト云フハ傳記ノ

これ行古ハ伊勢ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
〇上伊勢信太家ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
長壽ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
皇ノ所字ニシテ其ノ所産ハ
〇此書ハ二十代垂仁天
ノ七言ハ心ヲ記シテ其ノ所産ハ
佛中子ノ所産
僧ハ髮長ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
塔何良ノ所産
稱一寺と瓦曹ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
尼と女髮長ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
齋と片膳ノ所産
〇外七言ハ死と奈留ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
病夜須美ノ所産
稱一血ハ阿世ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
寺ハ撫ノ所産
稱一宗と蘭ノ所産
佛經ハ二十代欽明天皇ノ所字百濟心ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
垂仁天皇ノ所産ニシテ其ノ所産ハ
〇此書ハなせの依ちか

自皇と十代欽明の壬申より四百六十のれ傳上の典籍
八十六代を神天皇の序字と伝せしむる佛は傳の名をよれ
てのみをぶらんや序の紀と雄略天皇の序字に比宣に
れしむる未だ此の序の先しむるはあらずは傳例
多し然中彼志願寺の序のれにりしむる世の連のそ
序の序に宣しかりしむるはあらずは傳例
葦草水 序本 一卷

此序は次書記の抄し此書ハ正親町公通の序にりしむる
靈の社に春系信直序は次書記にりしむるは稻荷の序
東に波多志すの起しあつたりしむる垂加よりりしむる
乃の序にりしむるはあらずは傳例
いんいあつたりしむる通の葦草の序にりしむるは尾よえを
系、約有信志傳字の跋目と八月波多志すの起にりしむる

又享保庚戌五月松岡文雄の跋あり
神道五部書目抄 序本 六卷

此抄ハ、室基本紀 倭姫世紀 御鎮座傳記 御鎮座及芽記
御鎮座本紀と次書せりしむる片假字の序にりしむる○室基本紀
抄奥より右以伊勢抄考之校合而記之れ不傳心誓記之待
伊人之手而已園田心利享保辛丑の序にりしむる○倭姫世紀抄奥より
此抄以秦信慶之所述之書省其儒文并異說而以先師取聞
之言文之又加愚案然畧有所不充于心追而可考之于時享
保五年庚子仲夏磯波翁記之○御鎮座傳記抄奥書より右伊
勢秦信慶抄先師垂加所聞之事文合記之別傳書有之
于時享保癸卯季春武抄下各隱士園田心利之○御鎮座
次書記抄奥書より右秦信慶抄合諸家傳受加愚意記之者
也享保癸卯中冬園田心利○御鎮座本紀抄奥書より此抄者里
瀬一膳益弘之取記也省其儒文加清水氏取聞又附愚見然畧

群書一見 和書部一

四十二

新編

四十一

有所不克于心追而待塩土翁可也矣于時享保庚子秋磯波翁

五部書認辨 写本 十二卷 源 幸和

神道五部書の... 十月尾府南世因佐藤圓仲志利... 度今氏探... 文は... 書は... 是と云ん恭くるるの垂示せん

我が... 遷て... 卷間... 依ち... 是の... 官牒の

- 卷一 宝基本紀辨 卷四五 御鎮座傳記辨
- 卷六 御鎮座次第記辨 卷七八 御鎮座本紀辨
- 卷九 倭姬世紀辨

太神宮儀式帳 写本 二卷

外宮儀式帳ハ延暦廿... 大神宮司心八位下大中臣

群書一覽 和書部一

四十八

新編

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

卷之一 天神別記 卷之二 陰陽別記

卷之三 陰陽別記 天祖別記

卷之四 黄泉別記 卷之五 黄泉別記

祓除別記 卷之六 劍王別記

磐戸別記 卷之七 天孫別記

葬禮別記 大帳別記 海宮別記

卷之八 系圖別記 卷之九 系圖別記

卷之十 系圖別記 遷都別記 宝算別記

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

聖書一覽 和書部一

の傍らにけいひまの... 依りて... 神別記と多由義... 依りて... 書... 豊草... 中津國... 豊草... 中津... 依りて... 書... 豊草... 中津國... 豊草... 中津...

天書紀 写本

十卷 一本

御室書目大納言友永續成撰にせり... 亡失... 依りて... 書... 豊草... 中津國... 豊草... 中津... 依りて... 書... 豊草... 中津國... 豊草... 中津...

部十卷自平野兼滿朝臣借之令書字者也... 永亨九年... 月廿一日飛鳥井後二位中納言藤原朝臣雅世... 神學家は此書が... 通し古語拾遺... 書... 其餘参考す... 未書... 此書... 講習... 書... 神代口訣... 濱成の天書... 元集... 正統記... 纂疏... 神人の意... 發明... 大切... 具眼の人... 雜... 謝附會... 神... 此... 信... 田... 後... 遊... 文書... 此... 法... 此...

古語拾遺

一卷

齊部廣成

大同二年二月十三日... 五位下... 齊部宿禰廣成撰... 和學... 此書... 拾遺... 名... 齊部宿禰廣成の... 和學...

和書部一覽

和書部一

五

神道

天台僧徒の作とく神佛習合... 駁雜カ... 卷末

神道大意

一卷

一部兼直

ト部家... 唯... 神祇官... 兼直... 此書... 神道大意... 一部兼俱... 假字...

神道大意

一卷

一部兼俱

神道秘説

一卷

卷首... 神道序... 第一大意... 第二天地開闢... 第三天神七代... 第四地神五代... 第五三箇大事... 第六三種神器... 第七秋津島事... 第八千葉破... 第九神祇大副... 第十四位下兼友在判... 第十一右八箇大事... 第十二先年平野家相傳... 第十三秘本... 第十四神道之秘説也... 第十五長上神祇權大副... 第十六四位下ト部兼益判... 第十七以書神佛習合... 第十八條千葉破... 第十九ハ母の五臓六腑胎内八葉の蓮花也... 第二十撰雜カ... 神道録... 一卷... 一名詞宝傳大職冠鑑足... 天神七代地神五代... 諸神の化... 陰陽和合... 撰雜カ... 類聚神祇本源... 十五卷... 度會家行... 卷首... 天照豊受自玉太神宮祓宜... 四位上度會神主家行撰

和書部

和書部

天地開闢篇 天地取化篇 本朝造化篇 天宮篇
 內宮遷座篇 外宮御遷座篇 寶基篇 形文篇
 心御柱篇 內宮別宮篇 外宮別宮篇 神宣篇
 禁誡篇 神鏡篇 神道玄義篇
 此書卷々序次別列せしむ。神道玄義篇の奥に凡そ引用のちり
 周子通書 博聞錄 老子道經 古今帝王年代曆
 律曆志 周易 五行大義 淮南子
 元命苞 莊子 神皇實錄 先代旧事本紀
 日本書紀 神皇系圖 御鏡座本紀 寶基御靈形文圖
 大和葛城宝山記 天地靈覺書 阿含經 秘藏寶鏡
 圓悟心要 圓覺經 天地麗氣附錄 古事記
 古語拾遺 寶基本紀 太田命傳 神祇語傳圖記

降臨次芽記 和漢春秋 日本私記 切韻
 豐受皇太神繼文 統別秘文 中臣核訓傳 伊勢太神宮秘文
 仙宮秘文 大宮秘府 倭姬命世紀 麗氣記
 神室日出秘府 天口事書 形文深釋 神祇式
 儀式帳 阿波良波命傳 神記 神祇令 社記
 丹後國風土記 大同本紀 神祇令 格
 禮記 瑞器記 灌頂天女傳
 右の諸書より實と抄出。類聚す卷末に平貞和の御
 神奉り於祓禊度今作。實相と云の巻あり。源幸和の宗
 廟社稷答問と云。按。元集神皇正統記二書者北畠准后親房
 卿所撰也。當時外宮祓禊度會。神主家行所撰。類聚神祇本源。與
 書曰。此卷依北畠一品入道家之召借進之。於是。延元集及
 神皇正統記。說者皆所據。類聚神祇本源。而所以同於五部書。說及
 元集 八卷 北畠親房卿

和書部一覽

く我國の舊史と覽粗此乃乃取在知了すく都て十箇條令
て東家秘傳しり

天地未判名渾沌池 渾沌之形盤之鷄子也 陰陽初判一物生中也
五行成數各著其德也 惟陽二神產生人物也 變易五行建五八卦
地神五代應五行運也 相生相起此為頌逆 造化之端皆是去劫也
治世要道神勅分明也 以上十箇條各海りく卷末く東家秘
傳 北畠准三宮述作也

廿一社 記 寫本 一卷 同上

卷首の諸社事しとくえ社名号社号のしとくえと憾法も
くて廿一社御定の置り圓融院一条のあゆりく廿一社ハ
伊勢 石清水 賀茂 松尾 平野 稻荷 春日
大神社 大徳社 石上 廣瀬 大原野 吉田 住吉
日吉 廣田 梅宮 祇園 北野 丹生 貴船
石二十一社中述録起鎮座時代ホのゆけにす卷末一品儀同三

司作しり○按すく羅山の日本書籍考よ諸社記二十一社の
概りしりしれり親房の作かり一をこしりしり此書のゆな
く一櫻雲記卷中平十四年北畠文軍北畠准后親房薨す年六
十七中院一品号すく○此書真まの應永十三年三月下旬候以
阿部阿半法印和尚のゆけにす日朝道一祐圓 又應永十三年
八月廿二日弘長まのの集まり

神風和記 三卷 僧慈遍

此書のゆ櫻雲記卷之中く興國元年北畠曆應二年慈遍僧正神
風和記の卷撰作く献す

舊事玄義 十卷 同上

旧事紀の撰かりし書體天台の妙玄義の格かり此書のゆね
會釋了簡閑合如来のゆ佛作しりゆ故書ゆけゆの例
ゆゆゆ慈遍ハ伊勢長官の末子ゆ伊勢流ゆ
神通撰ゆゆゆ又兼好の徒ゆゆト部の竹撰ゆ

和書部一

五十六

春書一覽

自後抄 写本

一卷 山崎垂加

これら舊抄を義六の巻の中れりといふなり此抄号ハ垂加の他は
何れぞとてハ義六の義六講習といふに親町一位を通じ玉才自後
の字取取と抄号とつけをせられたり享保辛亥の○垂加の
の義六のり

古老口實傳 写本

一卷

神宮の沖りゆ 神宮の沖りゆの由本のり 大小神祇の使者狹
鳥鶏蛇おのり其餘神宮の故実如きなり○奥書言いつく
豊受太神宮ニ祢宜度會神主判 心守二年六月日以當田宮ニ
祢宜行忠神主を字に書留之乎多々折此記者故西河原乃也
官行在神主執下以書勘録 古老口實傳 祢宜心四位上
度令神主延談

宝鏡開始 写本

一卷

天鏡尊鏡 天鏡尊鏡のりこれ鏡の圖ハ心鏡の圖ニ依後の圖ハ餘神鏡
の圖ハのりこれ鏡の圖ハ心鏡の圖ニ依後の圖ハ餘神鏡
賀毛久一判

神祇秘抄 写本

二卷

作者のまのりこれ神佛習合の書なり序に成廿餘之向
答決神佛不二造ニ卷之口訣名神祇秘抄

神祇拾遺 写本

一卷

七代垂加 地許愛宕持以稻荷や保るれ餘は垂加の
しはあてり作者のまのりこれ神祇拾遺

諸神記 写本

二卷

此書は諸神の縁起鎮座ホのり記すなり作者のまのりこれ
十種神宝圖 写本

一卷

旧事紀事七のり十種の神宝の圖なりこれ瀧津鏡邊津
鏡八握釵生玉足玉死及玉蛇比礼蜂比礼品物比礼なり○由後

洋書一覽 和書部一

五十七

和書部一

十種の神空の十の作は... 記文の... 十種の神空問目 写本 一卷

旧事紀の十種の神空の... 珊瑚集 写本 二卷

天地開闢の... 十種の神空の... 十種の神空問目 写本 一卷

神道集 写本

八卷

卷首は安在院作... 神道集 写本 八卷

大裏神道 写本

一卷

此は大師の作... 大裏神道 写本 一卷

和書部一

二八

考ゆにわが空海立派の巻も号すは國の末は中仙言家長
日記大納言安世家記如引く此圖は本所撰記あるの如言す
○は陽成帝の時南光坊天海禁裏より二國に護りし
西都神々の通記に記さるる慶應侯もどし大内侍乃の
祿号下したりとの此書は天表并たり号せり

西都神道口決鈔

六卷 源慶安

此書は空海の西都神道二圖の如かりしを記し
西都稱号の宗派に依ていしを令剛界胎藏界と建立す
くこの流たりしを因て令胎以く西都の名なり稱号
以まゝいしより重徳太子兼学兼用の神道なる勅号は
はけは伝道の西都に中古儒門の如き流る儒乃一致
唯一并たり号するなり西都并たりと同一して
夫がうき○正徳六年孟春武陽青地祐乘序同年源慶安
し

西都神道口訣心鏡録

五卷 僧鳳潭

卷首は大日域京西華嚴寺住持僧瀟鳳潭撰し
神道口決抄の下の西都神道の二國空海の作なり
所論は天海の細注一貫の口訣一しを記すは皆故なり
かゝるの條は西都神道一條は駁言なりしなり
詳悉なり

神道八重垣傳

五卷 藤齊延

夫の八重垣は天の八重垣の限は遍滿し
はさ垣なり其真中と天上より天の沖より坐し萬物生
して不易なり地は八重垣は地の八重垣は土地の限遍滿
し餘すは萬物生すは皇帝は八重垣は皇帝
の八重垣は天之食限は遍滿し餘すは天之益入等偏傳
るは中河系は天皇帝は坐し天之益入等偏傳

かゝるめづる治教と布たすてさる國々を垣けり小くれども地
ハ主宰の君は銀下りて成りてさるるもさるるもさるるも其餘家
々ハさ垣けり一身ハさ垣けりさるるもさるるも百官農工商の
くかゝるもさるるもさるるもさるるも○宝永五年十一月齊延自序
聖之傳其本一而未至八百萬其傳之中託八重垣傳問今世俗背
八重垣傳者亦述焉

神道名目類聚抄 六卷

宮社神宝祭器幣帛冠履衣衾及社司の職等の事と門を
り類別別らりての舊記に依て其義を釋す○元禄己卯六月城
西野殿某自序りり○徳四年正月刻

- 第一卷 官社部 第二卷 神宝部
- 第三卷 祭器部 神官服部 第四卷 神祇部
- 第五卷 祭祀部 神官部 第六卷 雜部
- 陽復記 二卷 出口延佳

神宮秘傳問答 三卷

伊勢西宮の時より諸神沙汰の事より問答し奥あつて万治
三年三月廿三日於祓禊を今沙汰は五位上延良○按す
延良は延良自とぬ

古今神學類聚鈔 百卷

此書百卷の中 神國篇 六卷 神道篇 五卷
神階篇 十二卷 諸院篇 六卷 祭物篇 四卷
已上二十三卷は心付のやうに享保のやうに梓のす其餘は十
七卷文字の存す○時儼ハ尾張國津島の人なり
ハ其系直筋の事なりハ中比ト部兼奥の事なりハ未ハ東

神社考 詳節

一卷 同上

神啓蒙

八卷 白井宗因

此書は尾河源為房の著なり他より一考あり
序例或向惣目一卷 行りまはれぬことめ諸國の靈祠
邑の少祠より大祠を大略搜索したり諸書に考へて
りて發明もたれ然中播磨赤穂の内坂盛浦より守屋の
大臣の祠が考へて羅山の記より何より大行世は近世に
いふ甚不明の説より世の通し又強ゆる説も之宗因
代に一竊流の因士より津乃成より人しきり上或人の
説し又後かぬかともまよひ寛文の白井宗因より人し
社啓蒙中後白雲村を考へたり啓蒙の考は社考に
まよひて遙々考へたり凡例は神代卷も実より考へ
二二策の考へたりは考へた家の記録より考へたり
考へたり

神社便覽

一卷 同上

春日權現驗記

二十卷 五本

卷首は春日權現驗記繪目録より第一卷承平證宣の
第一卷嘉元神火の繪より至りて春日大明神靈
驗の繪より繪内なり○繪ハ繪所預右近大夫將監高階
隆兼 詞ハ第一卷より才五卷まで 鷹司前関白基忠公
第一卷より才八卷まで 藤原公成冬平公 才九卷より才十三
卷まで 前関白基忠公 才十四卷十五卷 持大内言冬基卿
才十六卷 基忠公 才十七卷十八卷 一乘院良信僧心
才十九卷二十卷 冬基公 ○目録の次は延慶二年三月左大臣
右近大夫藤原の序より前関白の関白父子四人藤原の
志懇切の餘結縁のあり他考へた文より考へたり 約諾せり

前の大徳山慈信院と相法一法め予友一の未業院東て専當
社の擁護仰きぬ神の懇志と耐す諸人の仰信院塔人たふと
概これ類系す逐これ切瑗一々々々々々々々々々々々々々々々
○奥書云云宝徳二年庚午三月下旬頃於社頭書子畢則以心本按
合畢 権預祐識判外寛永宝永の神の奥と云々

春日神社記改心 三卷

序云故の神と被祐舎ぬ在神社記一篇所著述するの被祐
余竊も若ふ神の家藏の記院一不取信用一々々々々々々々々々
社記改心人々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
是す其志とつん一々々々一且長者宣けきめ一々々々々々々々
神す竟も改心一々々々一此書成て多々一宮永元一十一月正預心三
位中臣連延英序○卷之一 序名 若ふ 卷之二 中社 九五社
小社 九七社 卷之三 若宮 中社 小社 九八社 已上諸書抄引

てくれ成燈すぬ人神主中臣連祐宗跋り

日吉社神道家記 一卷
巻首に祢宜正四位下文藏卿行九敬而撰述一何て唐崎神社
大宮二宮 聖真子社あり未社あり一々々々一氣向出改ありの何
々々々一其餘件祭のや々々々舟のや位階のや々々々併せしす
巻末に社務祝部の系圖大宮方二宮方八王子と社本の圖と載

住吉秘記 三本

住吉四社の名実注のやあやのや何れせし梅園氏の奥書は
墨江紀畧 二卷 巨妙子

往吉社偈和魂荒魂四託宣四本社長岡十五社其餘神宮寺津
寺等のや或ハのや中のや和考と注本のや何れせし一々々
す巻首に享保丁酉九月の自序あり巨妙子ハ紫野大心和尚の
ゆき享保と云ふ月刊行す

八幡宮本紀

七卷 貝原好古

らやほ丸のれしきく又神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり

神(一) 辨 写本

一卷

多田義俊

漢文のり神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり
又天平宝字四年七月廿三日の高野天皇の御至令東大寺
存すのり國加附す巻首は享保十六年四月迄のり
同のりゆる御登仲のり序のり○又一冊は神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり
享保庚戌十一月自序のり序のり○又一冊は神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり
又天智乙未のり神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり
又天智乙未のり神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり
又天智乙未のり神書すくは字加申のり日や制作文
字のり和訓のりかきと海せり

相混すのり神代の曲玉と玉垂と稱すのり
公文令は別り天子の神玉のりす法
神代玉のり神玉のりす法
神代玉のり神玉のりす法

神拜 神書 写本

一卷

同上

創 神書 写本

一卷

同上

後禊の起しは天令別天皇天智の
葵祭記 写本 一卷 同上
直字辨 写本 一卷 同上

直が神の... 義後の... 義後の... 義後の...

三種神器辨書

一巻 同上

神器所相傳各記... 義後の... 義後の...

神明憑談

二巻 同上

上巻 神代人代の差別... 下巻 神紀と... 木綿織の考...

獸肉論

一巻 同上

水康の跋... 猪鹿... 天皇の... 神代...

神道辨惑

二巻 持宝院聖應

伊勢兩宮の... 聖德太子の... 大岩の... 其餘種々の... 大の五の三月生玉...

神京問答

一巻 大江吉利

神代卷の巻一 天照大神降臨の國ハ豊前中津郡なりと云ふ
一月筑陽坪池山路序の十二月筑南園中安之漢文の路なり
○此書作者山本吉利桃葉と号す多田表佐内とす

天祖都城辨

一卷

本居宣長

明和の代或人神別中紀ハ天照大神の都ハ豊前國中津なり
○此書作者山本吉利桃葉と号す多田表佐内とす

神代卷

二卷

日本紀第一卷二の巻なり○活字本なり勅板と稱す元龜の
中親町池の刻せられたり外題ハ十九と云ふ元龜帝の
宸翰なり好古百録と云ふ

神代口訣

五卷

忌部正通

此書ハ先嚴依代貞法中より成り神代紀と云ふ佛教なり
○此書ハ先嚴依代貞法中より成り神代紀と云ふ佛教なり

日本紀神代抄

十一卷

五本

此書ハ後之位宣賢の獻しし神書講釋のけの
○此書ハ後之位宣賢の獻しし神書講釋のけの

日本書紀神代合解

十二卷

忌部正通の口訣 大外記環翠の講義 此と部

作者詳かす假字一々ひきりて神代巻を章段とかり一紙と
かゝの題は秋の題を以て統帯とす

神代巻風葉集 写本 十卷 山崎垂加

末書所多ありてその一は神代巻とす

神代巻私語草 写本 二卷

垂加の風葉集の記帳かゝりて私記に依りて寛保元年の
常静翁の内人ゆより抄了す此記し〇奥書に常静翁其
前雲かね江のうすゝゝ児島助三郎源高成のゆゑ故に
中より隠士とあり佐々木丹治と改より信美の漂舟せし
かほは横磨心ね系邑に住まよりね系邑八幡宮の地中より常静翁
靈社とありて寛延四年六月元成ぬ

神代巻日蔭草 写本 一卷 岡田正利

藻位より引くこれ日蔭草は五難翁訂正の切なりす
卒す予五難翁の口授抄とす

神代巻鹽土傳 五卷 谷重遠

漢字と以てけす重遠ハ土佐國の人

日本紀神代巻口義 十卷 多田義俊

流布のかゝるハ五巻一々神代との一々全部十巻一々神代と
下り

神代巻秘要抄 二十卷 同上

發端の巻より日本紀撰述の事紀古事記の事舎人親王の名
一々その日本紀私記の日本紀何講了式の事
ホカとす〇講式と浦下〇此日か書紀何講せん
〇の事全部二十巻何通達一々然一々神代巻何
ホ一其故ハ入代の何以て神代の何書のはせし
正むり〇かゝの何一々垂加は佳なりやもすれを易か

より記法はくくく

大枝解

一卷 源安範
 片假字を以て記す例との奉るは周礼左傳史記太平廣
 記等所引字義何釋すは至りくハ字通康殿字典等と
 ありマ○此書の作者森川安範ハ讃州の人一葛城慈和
 上の父ナリ卷末に字保三ハ正月安範漢字の自跋寛政十二年
 玄宜の跋等より寛政十二年正月刊行す

祝詞解

五卷 賀茂真淵
 延式部式第八卷の祝詞は後り巻首に自序を以て附記して
 古史御川は古事記御先と一日記を以てすは他ハ上古實
 直の國史なり且國語と云ふはれをよすは凡酒尼古語ハ古
 文和祭すはなりのかりしをいふは凡中記ハ古語ハ傳字
 と配するは傳字ハ古語ニシテ古語ハ傳字ニシテ傳字ハ古語
 引本方とれは准やう又は世の沖字者流曰は紀と專とするを

祝詞考

一巻 藤田大人 東麻呂國約の
 學文の大家一古今此書の大支那史ト古語の精微に
 りては徴とすはれをいふは凡中記ハ古語ハ傳字
 敷とすは他書はすはれを推し解の○此解延享年中成マ
 第一卷 一章十段皆祈年祭
 第二卷 八章 春日祭 廣瀬大忌祭 龍田風神祭 平野祭
 久度古園 六月次 大殿祭 御内祭
 第三卷 一章 六月晦大枝
 第四卷 十五章 鎮火祭 道饗祭 大嘗祭 鎮御魂齋戸祭
 伊勢太神宮 豐受宮 四月神衣祭 六月次祭 九月神嘗祭
 豐受宮同祭 同神嘗祭 齋内親王奉入時 遷奉太神宮祝詞
 遷却崇神 遣唐使時奉幣
 第五卷 一章 出雲國造神賀詞
 三卷 同上

此書ハ祝詞解とナリハシラシメ考テモハシクハ考テモ
コトナクシ明和五ノの自序ハ正序中ハ祝詞の付合と云々
ナリモ祝詞解ハ正序の初めハ正寛政十二年ハ人字法五
槐校ハ正序と云ナリ

大被詞後釋

二卷 本居宣長

真淵の祝詞考の中ハ大被の考ナリナリ考の誤ナリナリ
論ハ正序ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
下卷の附録ハ大被の祝詞解ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
中ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
出雲國造神壽後釋 二卷 同上
正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め

雜史類

水鏡

三卷 中山内府忠親公

神武天皇より仁明天皇までの御事ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
後ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め

水鏡異本

三卷

活字ナリナリ稀ナリナリ古日録ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
後ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め

大鏡

八卷 藤原為業

正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
皇太子ハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め
正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初めハ正序の初め

和書部一

才六 ちやうなほ 長保元十月朔日關白殿の御為十二日
入内しちやうなほ御下りしりまひ

才七 ちやうなほ 長保元十二月十五日皇太后御下りしりまひ

才八 初元 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才九 石濱 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十 日蔭のつ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十一 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十二 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十三 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十四 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十五 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十六 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十七 音楽 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十八 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十九 ちやうなほ 長保元十月廿三日御下りしりまひ

才十九 伊賀志 八月朔日 一

才二十 伊賀志 十月十日 一

才二十一 伊賀志 五月十日 一

才二十二 伊賀志 六月十日 一

才二十三 伊賀志 七月十日 一

才二十四 伊賀志 八月十日 一

才二十五 伊賀志 九月十日 一

才二十六 伊賀志 十月十日 一

八月男... 納め... 才二十七... 才二十八... 才二十九... 才三十...

才三十一 伊賀志 十一月十日 一

才三十二 伊賀志 十二月十日 一

才三十三 伊賀志 正月十日 一

才三十四 伊賀志 二月十日 一

才三十五 伊賀志 三月十日 一

才三十六 伊賀志 四月十日 一

才三十七 伊賀志 五月十日 一

才三十八 伊賀志 六月十日 一

才三十九 伊賀志 七月十日 一

才四十 伊賀志 八月十日 一

Handwritten notes at the bottom of the page, including the number 八十一.

春言一覽 春言一覽

才三十一 春言一覽 春言一覽

才三十二 春言一覽 春言一覽

才三十三 春言一覽 春言一覽

才三十四 春言一覽 春言一覽

才三十五 春言一覽 春言一覽

才三十六 春言一覽 春言一覽

才三十七 春言一覽 春言一覽

所望をけぬ所は... 夜の煙... 春言一覽

栄花物語抜萃

九卷

首巻より系圖... 餘ハ... 春言一覽

三十一 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十一 世のたぬ タヌ
 三十二 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十二 世のたぬ タヌ
 三十三 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十三 世のたぬ タヌ

結 十巻

三十八代は一條坊の万事おさまりついで高倉のまゝ年中
 まで百四十餘年の御記せり他者つきなきは○序まや
 ろしの御記はまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 三十九代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十一代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十二代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十三代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十四代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十五代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十六代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十七代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十八代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 四十九代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば
 五十代は御記のまゝなればまゝなればまゝなればまゝなれば

三十一 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十一 世のたぬ タヌ
 三十二 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十二 世のたぬ タヌ
 三十三 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十三 世のたぬ タヌ
 三十四 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十四 世のたぬ タヌ
 三十五 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十五 世のたぬ タヌ
 三十六 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十六 世のたぬ タヌ
 三十七 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十七 世のたぬ タヌ
 三十八 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十八 世のたぬ タヌ
 三十九 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 三十九 世のたぬ タヌ
 四十 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十 世のたぬ タヌ
 四十一 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十一 世のたぬ タヌ
 四十二 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十二 世のたぬ タヌ
 四十三 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十三 世のたぬ タヌ
 四十四 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十四 世のたぬ タヌ
 四十五 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十五 世のたぬ タヌ
 四十六 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十六 世のたぬ タヌ
 四十七 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十七 世のたぬ タヌ
 四十八 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十八 世のたぬ タヌ
 四十九 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 四十九 世のたぬ タヌ
 五十 海老巻 ハナハナ 巻 マキ 五十 世のたぬ タヌ

十月十日 十月十日 十月十日
 久未の月 九月内宴の月
 保名曲の 保名曲の
 二条市母の 二条市母の
 應保二年位 應保二年位
 梅の白い 梅の白い
 梅の白い 梅の白い
 梅の白い 梅の白い

十五 十六 十七
 雪の白い 雪の白い
 白川の白い 白川の白い
 春の白い 春の白い
 秋の白い 秋の白い
 冬 冬
 春 春
 夏 夏
 秋 秋
 冬 冬

保氏のもの... 此書ハ一名宇治大御言ゆ... 保元物語... 此書ハ一名宇治大御言ゆ... 保元物語... 此書ハ一名宇治大御言ゆ...

世継物語

保元物語

此書ハ一名宇治大御言ゆ... 保元物語... 此書ハ一名宇治大御言ゆ...

一卷 或ハ三巻

二巻

葉室大納言時長

此書ハ一名宇治大御言ゆ... 保元物語... 此書ハ一名宇治大御言ゆ...

報恩院... 年七月兵乱の如き... 保元物語... 此書ハ一名宇治大御言ゆ...

才九十六代光嚴院より才百四代はむ因依より...
 記せり。法々當今と稱し...
 神皇正統記至于後醍醐院令鑑之全部也光嚴院以来繼
 嗣奉加載之為補老後之志氣也匪敢為續集矣小槻者
 稱判明和丁亥歲正月阿波源元寬序と附...
 梅下東見記は續神皇正統記二十卷と云...
 其書い... 寓目せ... 何人の他...
 櫻 二卷

此書何人の他... 南のの... 假字... 記す
 上卷 醍醐天皇の即位文保二年二月... 延元... 十二月
 主上潜... 都松出... 吉野へ遷幸... 楠正行来...
 護...
 中卷 延元二年 北京建武四年 南の醍醐帝 北京光明院 正月 尊氏
 式部大輔賴朝を以て奥州の管領とし 同八月奥州の凶徒

起... 平二十四日 北京志安三年 十二月... 此は南の
 中伊豫備前石見長門肥後日向大隅薩摩都く廿箇國
 の... 北國は宗良... 懐良... 北國
 司...
 下卷 建徳元年 北京志安三年 後龜山院帝位より... 春...
 月廿... 夜赤... 真嶋... 家僕中村... 長祿...
 野の... 追... 村... 殺... 真... 此書...
 内裏... 敵... 南... 此書...
 此書... 春...
 此書... 春...

ナノの如ク年久しく行々横川の信天界坊能隣之に何行と
めく四十卷とす又應永の比唐船来りて唐の官人明判此書と云
々す將軍義持諸山の傍に作せしむる所清書一官人
ナノ心世々和泥に刑部左衛門少輔と云し○按ずるに鎌倉大草紙
水牛記にいつはらも氏の時あり五十の年探ひしむるに
是め谷城もいつはらも南方の軍閥東奥方合派一系ありはし
猶ほ太平記批札にのせしむる○又按ずるに惠治の
日本朝通鑑と云觀應元年三月獨清軒法印玄惠没此人始講程朱
新釋古來用漢唐註釋唯讀史記漢書玄惠始讀資治通鑑此島
親及傳受之

参考 太平記

六十四卷

常州水府の儒士今井弘濟内菴貞孫 西山公に依りて校定す
書體参考 保元平治物語 同日一考訂すよれば 卷八 西源流

中毛利家と金勝院が今川家と北條家と南都が今川家の中
出川家の中ふかきし参考は八皇年代略記増鏡より補任記
運録と鏡歴代皇紀代將軍執權次第保曆間記神明鏡と條家
備舟木系圖東寺執行日記其餘數部は奉り

明德記

二卷

原中一巻今ふく二巻とす明德元年山名氏清山名滿幸謀叛
一内野合致す鹿苑院より松行くとも松軍一付中
る代々の始末記す

應永記

一卷

一名大内義弘通治記と号す鹿苑院殿の時大内介義弘泉抄撰
てあり謀叛のすゝめを軍兵松樹へきりて
亡し記す○按ずるに明の張居正史の経國大
典は倭學子庭訓往來應永記雜華富士とのヤリ

嘉吉記

一卷

詳書一覽

嘉吉二年赤松滿祐普光院歿已而館へ請ひて葬らばり
播州へ遁せ下り山名細川比下の大軍を討つて赤松一
家滅亡せしむる記せり中橋遠室黒龍宮加へ序あり寛文九
年刊行す

椿

葉記 写本

一卷

道欽親王

推免院崩御の事皇子をす皇統に継ぐに付
伏見に道欽親王の所子被仰位しつるに
義教公に譲りし事記せり此記ハ枝葉集も載りし事
之ハねむ因由の所又此記ハ枝葉集も載りし事

應

仁記

二卷

原ハ一卷に慈照院義政公の時管領細川勝元山名宗全と権威
ありしに諸大名両方ふれし七年の間京都に戦ひあり
が一路中洛にこれありしに焼亡す勝元も宗全も
病死す勝元も後継ぎす其餘の事とありし事

争致行儀の事あり○坊間承久記明德記應仁記と合刻

元

太記

万松院我暗公ら好長慶か乱りし事あり此記ハ
へしむる事ありし事ありし事ありし事ありし事

鎌倉大草子

写本

一卷七本

卷首ハ真字序あり序中のハ本朝稱記録有不承不承
就中此記者尊氏末記之遺書而関東大家之舊記也
卷之一 永和五年三月三日改元康暦元年三月
大膳大夫退治 上杉憲方入道合京外生勢あり
暦二年三月至徳二年三月嘉慶元年の事あり
元年三月四月五月七年九年十年十一月十九日あり
卷之二 應永二十二年三月廿五日廿九日三月廿九日あり
此卷の中小栗照兼十人の郎等の事あり

以下は併に附す元禄の刻

和漢合運圖

四卷

慶長年中洛下圓智重撰系多ハ系於要旨の世雄房日記
○及古撰の和漢合運塵劫記ハ山城暖帳信吉田元由の他ハ

和漢編年表合圖

一卷

皇和四年東海の虎園抄為化々

皇和年代記

写本

一卷

慈鎮和尙

愚管柱のくめ附すのすれをらひし

年代記

一卷

享祿年中仙波実海を編す

如是院年代記

写本

六卷

卷第一 人皇第一代神武天皇元年より第八代孝元天皇五十七年
卷第二 人皇第九代開化天皇元年より第十五代神功皇后六十九年
卷第三 人皇第十六代應神天皇元年より第十八代有明天皇七年

卷第四 人皇二十九代天智天皇元年より第六十二代村上天皇康保四年
卷第五 人皇六十三代冷泉院安和元年より第九十代後宇多院安和十年
卷第六 人皇九十一代伏見院應元年より第一百八代親町院應元元年

和漢年契

一卷

高祖

此書巻開け直し六十年と二覧すぐ上層ハ皇朝の年代にして

神武天皇より今の享和に至る下層ハ漢土の年代にして周の平王より

今の嘉慶に至る又中層ハ文治の初より將軍家此年代ハ中層より

のりすの頼朝御より當時に至る○和漢帝王の御諱世系りハ

ハ歴代の治乱大人皇子の薨卒等皇朝ハ國史大日本史其他諸の天

録より採摘し下層の上より漢土ハ通鑑二十二史等より

採出しく下層の下より各主の年紀と本○編首ハ和漢帝王索引歴代

年号索引和漢帝王系圖等を附し巻末ハ皇朝年号改元索引と

和漢年契 一巻

附す〇凡例の末に皇朝大化已前の異年号抄ありてそのかゝるに
まじりてかゝる〇寛政八年十月津國三村其原序同九年夏越前
中丸老駁らして同年上木す

和漢年契 一巻

翻刻すところ此和漢年契と抄畧しとて旅行の便覧なるな
る袖珍本なりこれと和漢ともよら十年と一紙小列せり下支と
とてこれより一葉より位決定めんれを數十葉と隔けしり其
格と照しとて求むる煩ハ一りし年号は檢出するは巻首
小索引ありてこれ首字と畫數にて分りてり巻尾は慶長以來の
年号改え索引と附す享和元年陸可考此序らと

